



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4066 号 2017.12.8 発行

皇室 節目の日も国民と 両陛下、働く障害者と交流 毎日新聞 2017年12月8日



三越伊勢丹ソレイユ・ナレッジパークに到着された天皇、皇后両陛下＝東京都新宿区で2017年12月8日午前10時25分、代表撮影

天皇陛下の退位日を定める政令が閣議決定した8日午前、陛下は皇后さまとともに公務に臨まれた。「障害者週間」(12月3～9日)にあわせ、毎年この時期に福祉関連の施設などを訪ねており、今回は障害者が働く三越伊勢丹ソレイユ(東京都新宿区)を訪問。ギフト用の包装に使うリボンの製作作業などを見学し、社員たちと交流した。2019年4月30日の退位の日まで、国民に寄

り添う姿勢は変わりなく過ごしていく。【山田奈緒】

同社は三越伊勢丹ホールディングスの関連会社で、約80人の知的障害者や身体障害者が働いている。百貨店の販売員が使うギフト用の袋の製作などをしており、天皇、皇后両陛下は、同社の四王天(しおうでん)正邦社長の案内で社員の作業の様子を見学した。カラフルな細いリボンをカールさせ、繊細な飾りに仕上げていく過程に、熱心に見入っていた。両陛下は二手に分かれて作業の様子を見て回った。陛下は「ここでの仕事には慣れましたか。よくできましたね」などと声をかけ、皇后さまはリボンを手にして「きれいにできましたね」と笑顔で話していた。

案内を終えた四王天社長は記者団に「社員の仕事ぶりをとても丁寧に見ていただいたのが印象的だった」と話した。

両陛下は皇太子ご夫妻時代から、行事出席のための地方訪問の機会を利用するなどし、福祉の現場に足を運んできた。障害者週間にちなんだ施設などの訪問も恒例にしている。福祉を支える人々と幅広く交流したいという意向があるといい、リハビリ施設や通所施設などのほか、2015年には競技用車いすの製造会社を訪ねた。

両陛下、障害者のリボン作りをご視察

産経新聞 2017年12月8日
三越伊勢丹ソレイユに到着された天皇、皇后両陛下＝8日午前、東京都新宿区(代表撮影)

天皇、皇后両陛下は8日、障害者週間(3～9日)に合わせ、障害者の就労を支援している三越伊勢丹ホールディングスの関連会社「三越伊勢丹ソレイユ」(東京都新宿区)を訪問し、障害を持つ人々が贈答品に付けるリボンなどを作成する様子を視察された。



宮内庁によると、両陛下は皇太子同妃時代から障害者施設をご訪問。平成7年に現行の障害者週間が設けられたのを機に、8年以降は、この時期に関連施設を訪問されている。

両陛下はこの日、知的障害者や身体障害者らが、百貨店で使われるリボンやラッピング袋を作る様子をご視察。天皇陛下は「この仕事はおもしろいですか」、皇后さまは「仕事をお願いしますね」と話しかけられていた。

同社は今年度、東京都が新設した「障害者雇用エクセレントカンパニー」を受賞している。

独自のタッチみつけた 埼玉県立近代美術館で障害者アート展



産経新聞 2017年12月8日
作品を眺める来場者ら＝6日、県立近代美術館（飯嶋彩希撮影）

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ?埼玉でこんなのみつけちゃった♪」（社会福祉法人みぬま福祉会など主催）が県立近代美術館（さいたま市浦和区常盤）で開催されている。10日まで。

同展では、県内の障害者作家約600人から選ばれた97人が手掛けた約370点を展示。作家のほとんどが重度の障害を持っているという。立体作品からルーズリーフにペンで描いた絵画まで表現方法はさまざまで、多彩で独特な作品群を楽しめる。

飛行機を題材にした絵が人気の作家、渡辺あやさん（30）は今回、飛行機がロンドンとギリシャの街を飛ぶ様子を4色の色鉛筆で描いた。「海外で個展を開くことが夢なので、外国を舞台にした」と制作意図を話した。

同会は「障害は個性になる。独特の色使いやタッチに驚かれる芸術関係者の方が多い。ぜひ足を運んで」と来場を促した。

生活保護費、最大1割下げ 来年度、13年度に続き 中国新聞 2017年12月8日

厚生労働省は7日、来年度の生活保護費見直しで、食費や光熱費などに充てる「生活扶助」を最大1割程度、引き下げる検討に入った。年齢や世帯形態によって増額となるケースもあるが、一般の低所得世帯の消費支出より支給額が多いとの調査結果を踏まえ、見直しが必要と判断した。

生活扶助の支給水準は5年に1度見直している。全体では前回2013年度に続き2回連続で引き下げとなる見通し。都市部を中心に高齢単身世帯などが多く含まれ、反発が強まりそうだ。

一部の子育て世帯で減額幅が大きいため、厚労省は別の案も検討している。

厚労省はひとり親世帯を対象にした母子加算も一部引き下げる方向。8日に開く社会保障審議会の部会で専門家の意見を聴き、今月下旬の予算編成までに詳細を決める。

見直し案では、支給水準が高い大都市部を中心に、金額を引き下げる。例えば中学生と小学生の子ども2人を持つ40代夫婦は支給額（各種加算を含む）が月約21万9千円から約19万4千円に11%減る。65歳の高齢単身者も月約8万円から約7万3千円と、8%マイナスとなる。

都市部以外はケースごとに分かれ、地域や世帯によっては7%程度増えることもある。

厚労省は急激な減額を緩和するための措置を設けたり、数年間で段階的に実施したりする方針。削減分は生活保護世帯の高校生の進学支援といった子どもの貧困対策などに振り向ける考えだ。

介護職員の定着図れ 若手交流会で悩み共有

岐阜新聞 2017年12月8日

◆県内の離職者、53%が「3年以内」

若手介護職員の定着を図ろうと、県介護福祉士会（瑞穂市牛牧）は県内施設の職員を集めた交流会を開いた。実施の背景には就職3年以内で辞める職員の多さがあり、同会は「職員が定着しなければ介護の質の低下を招きかねない」と危機感を持つ。それぞれの施設で働く若者らが職域を離れて本音で語り合う中で悩みを共有し、自信を深めた。



仕事の苦勞などを語り合う若手の介護職員ら＝岐阜市六条南、岐阜産業会館

県の調査によると、昨年度の介護施設の離職者のうち勤務年数3年以内の割合は53.6%。同会は「目の前の事象に追われて研修が十分にできず、新人職員が悩みを抱えて孤立してしまう」と指摘する。離職理由は「他に条件の良い仕事があった」が37.6%、次いで「職場の人間関係に問題があったため」が23.8%だった。

交流会は県の委託事業の一環で初めて開催し、岐阜、中濃、飛騨の3圏域で各2日間行った。

岐阜市内で開かれた交流会には、就職から1年未満の職員を中心に約50人が参加した。「入所者とのコミュニケーションがうまくいかない」「夜勤がしんどい」「もっと頑張らなきゃと思ってはいるけれど」などと、初対面ながら話は尽きなかった。

技術研修も行われ、入所者の衣服の脱ぎ着など、生活支援の技術の基礎を実践形式で確認。施設によっては段階を踏んで技能を身に付けてもらう余裕がないために、必要な所作が自己流になっている場合が少なくないためという。海津市の社会福祉法人で勤務して2年目の女性は「自分の仕事について見つめ直せた」と笑顔を見せた。

浅井タヅ子会長は「職場の垣根を越えて関わることは不安の解消につながるはず。専門職としての喜びを感じて仕事に臨めるように、今後も取り組みを続けたい」と話した。

障害者暴行で支援施設元職員らに有罪判決

NHK ニュース 2017年12月8日

宇都宮市の障害者支援施設で、知的障害のある入所者の男性に暴行を加えて大けがをさせたとして、傷害などの罪に問われた施設の元職員らに対する裁判で、宇都宮地方裁判所は「犯行は無抵抗の被害者に一方的に行われた」として、執行猶予のついた有罪判決を言い渡しました。

宇都宮市の障害者支援施設「ピ・ブライツ」の元職員、松本亜希子被告（25）と、施設に入所していた佐藤大希被告（22）はことし4月、知的障害のある入所者の男性に暴行を加え、大けがをさせたとして傷害の罪に問われました。

松本被告は、別の施設で入所者の顔をたたいたなどとして、暴行の罪にも問われました。

8日の判決で宇都宮地方裁判所の柴田誠裁判官は「犯行は無抵抗の被害者に一方的に複数回行われ、生命に重大な危険を及ぼしかねないものだった」と指摘しました。

そのうえで「障害の特性について教育を受けていなかった被告が感情の高まりを抑えられなかった」と述べ、松本被告に懲役2年4か月、執行猶予4年、佐藤被告に懲役2年、執行猶予4年の判決を言い渡しました。

目黒区職員が生活保護受給者の預金など444万円着服 懲戒免職

産経新聞 2017年12月8日

東京都目黒区は6日、生活保護受給者の預金、心身障害者福祉手当を不正に引き出すな

どして、444万1276円を着服した生活福祉課の男性職員（55）を5日付で懲戒免職にしたと発表した。

区は10月末、同職員が平成20年8月から29年11月までに32万円を着服していたと公表したが、その後の調べで、さらに4件の着服があったことがわかったという。

青木英二区長は「事件の責任を重く受け止めており、区民からの信頼回復に向けて全力で取り組んでいく」とコメントしている。

児童のズボン脱がせ撮影・ハエたたき 長崎市の2保育所 朝日新聞 2017年12月7日

長崎市の二つの私立保育所で9～10月、ズボンを脱がせた児童をスマートフォンで撮影したり、児童をハエたたきでたたいたりといった虐待行為があった。市幼児課への取材でわかった。関わった2人の保育士はいずれも、11月末までに依願退職した。

同課によると、10月に虐待があった保育所では、保育士が1人の児童のズボンを脱がせて、児童の身長より高いところにある物干し用のロープにかけ、児童がズボンをとろうとしている様子を自身のスマホで撮影。その動画を保育所の同僚に見せていた。保育士は「虐待との認識はなく、遊びのつもりだった」と話し、行為を認めたという。

9月に虐待があった別の保育所では、昼寝の時間に騒いでいた児童11人に対し、保育士がハエたたきで尻や足をたたくなどしたほか、自身の上履きを投げつけたり、馬乗りになって児童を押さえつけたりしていた。保育士は行為を認め、「虐待とは認識していたが、子どもを落ち着かせることができない、いらだちを抑えられなかった」と話したという。

いずれの行為も、市への匿名の電話や投書をもとに市が調査し、発覚。いずれも虐待行為にあたりと判断した。複数の保育所で問題が明らかになったことから、市は先月、保育を担う市内の全施設に、子どもの人権を最大限尊重することを徹底し、関係法令を順守するよう求める通知を出した。（真野啓太）

<ツイセキ>AV出演強要問題 被害者が語る実態 報道ランナー 2017年12月6日

【アダルトビデオの出演を強要された女性】「自分ができないと思ったこともやらされたし、



痛いって言って泣き叫んでた。心も体もズタズタな状態で帰ったという記憶があって」

いま、社会問題となっているアダルトビデオへの出演強要。背景には少女たちを狙うスカウトマンの存在があります。

【記者レポート】

「あ、男がいきました。男がずっと女性につきまっています」
大阪の夜の繁華街でも、その姿が...

【アダルトビデオの元スカウトマン】「もうお金としかみてないです。2人きりになれば何とでも言えるので」

<少女たちの身に迫る危険とは一体？>

かおりさん（仮名）のきっかけは5年前。

大学4年の時、駅前である男に声をかけられたことでした。

【出演強要の被害にあったかおりさん】「芸能関係で活動されています？って言われて。

有名アーティストの名前出してこういう子もプロデュースして、デビューさせたんだよって。この人なら信用できるかなって雰囲気はありました」

音楽業界への憧れがあったかおりさん。就職も決まっていたが、音楽デビューを約束するという男の言葉を信じ、芸能プロダクションへの所属を決意しました。

しかし、最初の仕事はサイパンでのグラビア撮影。

さらに、ヌードまで要求されたのです。

そして、撮影の最終日、プロダクションの社長から唐突に話を切り出されました。



【アダルトビデオ出演強要の被害

にあったかおりさん】「AVは芸能界でいうここで、グラビアアイドルは芸能界で言うここだよって。一回世にさらしちゃったんだから、どんどん脱いでいかないとみたいなことを言われて。そういう方向に行きたいわけじゃないんでって言っても、ずっと説得してくるんですよ」

プロダクション側の勝手な言い分で、かおりさんにアダルトビデオの出演を要求。

その後半年間、説得は続き、状況はさらにエスカレートしていきます。

【出演強要の被害にあったかおりさん】「椅子で囲まれて、一回ヌードになっちゃってるから、もうそこ（アダルトビデオ）にしか道はないよみたいな感じで。やめたいですと言ってもすごく威嚇してくる雰囲気を出してくる。とにかく帰してくれない。逃げられないんですよ」

かおりさんは精神的に追い詰められ、契約書にサインし、出演せざるを得なくなりました。

なぜ、このような状況に陥ってしまったのでしょうか？

<元スカウトマンが語る実態とは？>

取材班は、およそ2年間アダルトビデオのスカウトをしていたという男性に接触しました。



【アダルトビデオ元スカウトマン】

「モデルさんとかタレントしませんかとかそういう入口を広めにとって入っていく感じが多い。簡単に芸能人になれるような世の中なんで、スカウトマン的にも声をかけやすい」少女たちの心を巧みにくすぐるスカウトマン。

彼らを動かすのはプロダクションからの高額な紹介料です。

【アダルトビデオ元スカウトマン】

「紹介すれば多い時で1人30万円。嘘ついてでもプロダクションに連れていったりしますね。そういう現場に来てしまえば後戻りできない」

度重なるプロダクションからの圧力に対して、逃げ道がなくなったかおりさん。

当時の心境を綴った日記には...

—かおりさんの当時の日記—

「私が勝手に飛び込んでいく判断が親戚にまで悪影響を及ぼすことになる。私はどうなってもいいけど迷惑はかけたくありません」

【出演強要の被害にあったかおりさん】「自分ができないと思ったこともやらされたし、痛いって言って泣き叫んでた。はい、またやり直しね あなたが泣いてわめくから全然帰れない、これ終らないと帰れないよって。できないはだめっていうことだった」

しばらくはトラウマで家からも出ることができなかったという

かおりさん。結局、プロダクションの社長が金を持ち逃げし、音楽の夢も叶うことはありませんでした。

少女の人生を大きく変えてしまう、アダルトビデオ出演強要問題。

ことし10月、執行猶予付きの有罪判決を言い渡された男は、インターネットサイトで「給料3時間5万円、モデル募集」と呼びかけ、女子高生など200人以上に出演を強要したとされます。

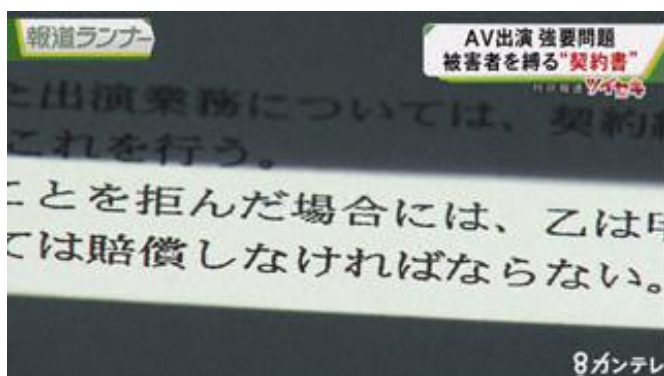
関係者によると、いまアダルトビデオ業界は、出演料が安くすむ普通の少女を狙っているといいます。

【スカウトされたことがある22歳の女性】「前働いていたスーパーの店に名指しで電話かかってきて、うちの部下があなたのことを見て、ちょっと気になったみたいと電話してきた」

(Q. なんの勧誘?)

「アダルト (ビデオ)」

【16歳の娘をもつ母親】「昔小さい時 (娘が) スカウトされたことがあって、娘が一人で出歩くときは報告してもらいたいなって思う時はある」



様々な形でスカウトされる少女たち。なぜ出演を拒否できないのでしょうか?

<背景に“契約書”の存在>

これは関西テレビが手に入れたあるプロダクションの契約書です。

「自分の意思でヌード撮影を決意し、専属タレントとして出演業務を行う」

あくまで強要ではないとした上で... 「出演業務を拒んだ場合は、それに

よって生じた一切の損害について賠償しなければならない」

少女たちにとって一方的に不利な契約。

出演を拒否した場合、契約書をたてに、数千万もの違約金を求める業者もあるといいます。ではなぜ、サインしてしまうのでしょうか?

【アダルトビデオ元スカウトマン】

「その場で契約書を隅から隅まで読める女の子はほとんどいない。異様な雰囲気の中でサインすると冷静ではない。判断は難しい」

また、その時の少女たちの心理状況を、支援団体の事務局長はこう分析しています。

【被害者相談団体 SEAN 遠矢家永子さん】「相談を受けて驚いたのが気配りができる子が被害にあっている。怪しいと思っても、加害者に迷惑をかけてはいけないと思う。」



親に言えば、ばれたら心配されるかもしれない。身に起こっていることが人権侵害である、犯罪であるという認識の上になてない子が非常に多い、それを（加害者が）巧みに利用しています」



5年前、被害に遭ったかおりさん。これ以上、新たな被害を生まないようにと、チャリティイベントなどで自分の経験を語ったり、YouTubeで「くるみんアロマ」の名前でメッセージを発信したりするなど、活動しています。

【出演強要の被害にあったかおりさん】「被害がここまで広がっていると知って他人事じゃないと思った。

それで傷つく女の子たくさんいると思う。実際（加害者の）社長に直接言われたことがある。バカな子は自殺しちゃうんだよって。ひどい、人の命を何だと思っているんだろう。だから、自分が言わなきゃって」

増え続けるアダルトビデオへの出演強要問題。

狙われているのは、どこにでもいる普通の子です。

活躍する女性応援 大阪サクヤヒメ表彰

大阪日日新聞 2017年12月8日



大阪商工会議所が在阪の企業や文化活動で活躍する女性を応援する「第2回大阪サクヤヒメ表彰」の表彰式が7日、大阪市内のホテルであった。大賞には積水ハウスの小谷美樹・ダイバーシティ推進室部長が選ばれ、「受賞者の皆さんとともに、大阪を輝く街に」と抱負を語った。尾崎会頭（右）、選定委員長の古川実副会頭と大賞受賞を喜ぶ小谷さん（中央）＝7日、大阪市中央区のシティプラザ大阪

本年度は62人の応募があり、大賞のほか、大阪サクヤヒメ賞11人、活躍賞18人を選定。式では大商の尾崎裕会頭が、各受賞者に表彰盾

を贈った。

大賞の小谷さんは、住宅の省エネ断熱性能の向上を実現したほか、現職として業務経験と出産・育児経験を生かし、グループの200人の女性管理職登用計画を進めた。社外でも、女性の働き方改革に向けた活躍の取り組みなどが評価された。

受賞スピーチでは「大阪はまだまだ女性の力を生かし切っていない。受賞者の皆さんと一緒に大阪を女性のパワーとイノベーションで輝く街にし、会社、日本を引っ張っていけるような活動ができれば」と話した。

表彰は、女性活躍推進事業の一環で、女性役員や管理職などの応援と模範輩出のため、16年度に創設した。サクヤヒメは、日本神話に登場する強く美しい女神。

このボタン押して 信号機使い方、多言語表記

大阪日日新聞 2017年12月8日

大阪府警も交通トラブル対策に乗り出した。訪日外国人客（インバウンド）が押しボタン式信号機の使い方が分からずに戸惑っているとの声を受け、信号機に使い方をイラストと多言語表記で説明する標示板の設置を10月末から始めた。

大阪観光局によると、大阪を訪れる訪日客は2012年から5年連続で増加。16年は

過去最多の940万人を記録し、今年9月末時点で既に832万人に上っている。

しかし、日本の交通ルールを認識していないため、「(信号機のボタンを押さず)青になるまで待ち続けている」「信号を無視して横断している」との情報が警察に寄せられているという。タクシー運転手の男性(57)は「赤で渡っているのを見たことがあるが危ない」と指摘する。

大阪城公園近くの押しボタン式信号機。イラストと多言語で使い方を説明する表示板が取り付けられている＝大阪市中央区

こうしたことを受け府警は、府内約1300カ所の大部分の押しボタン式信号機に英語、中国語、韓国語で「ボタンを押して渡ってください」と書かれた表示とピクトグラム(図記号)を併記した案内板を設置していく。大阪城や中之島といった観光地周辺62カ所については、年内をめどに優先して付け替える。

20年の東京五輪・パラリンピックを踏まえ、訪日客に道路標識を理解してもらう取り組みも推進。府内にある一時停止を示す「止まれ」の標識に、「STOP」の文字を加えたものに順次変更する。

府警交通規制課の担当者は「訪日客にも交通ルールを理解してもらい、事故防止につなげたい」と話す。



副業不可は社会損失 「壁を超える」テーマにイベント 大阪日日新聞 2017年12月8日

働き方から子育てまで、第一線で活躍している人が「壁を超える」をテーマに意見交換するイベントが6日、大阪市北区のグランフロント大阪で開かれた。優秀な人材を社会で共有するため、副業を認める重要性が指摘されたほか、お笑いコンビ「クワバタオハラ」



のくわばたりえさんが子育て中の男性の時短勤務を提案した。

子育て中の「男性の時短勤務」普及に向けて意気投合するくわばたさん(右)と青野社長＝6日、大阪市北区

ソフトウェア開発会社「サイボウズ」が、年に1度自社の事業を総合的にPRするイベントの一環。同社は、生産性向上や社員の力を引き出すため、在宅をはじめ多様な勤務制度を運用している。

くわばたさんは、男性の育児休暇が進んでいない点を批判。「せめて朝の忙しい時間や、保育所への迎えの時に旦那がいてくれれば」と男性

の時短勤務の普及を熱望した。

ロート製薬の山田邦雄会長は、同社が副業を認めている背景について、長期的には会社の発展につながる見方を示す一方、「自社で人材を囲い込むのは日本の損失」と指摘。性的少数者(LGBT)の関係者が、偏見を持たずに接する大切さを説く場面もあった。

サイボウズの青野慶久社長は「相手の気持ちに共感して歩み寄る姿勢を大事にしたい」と、ポイントを示していた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

